
AROMORD CORE forAnother

伊南屋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

AROMORD CORE for Another

【Nコード】

N1439U

【作者名】

伊南屋

【あらすじ】

アーマードコアfA本編をベースに、独自解釈、独自補完、妄想 つまるところフロム脳全開で再構成しています。クロスオーバーについてはAC過去シリーズからちよつとだけの予定。

A c t ・ 0 0

平等は無く、平和も無い。

歴史とは戦乱の記録であり、常に篡奪者がそれを書き加えていく。
未来永劫、過去永劫。

A c t ・ 0 0

国家。その概念が無くなり、世界の統治者が企業に取って代わられたのは数十年余り過去の話である。

一定の資源を奪い合うゼロサムゲーム、止まぬ戦乱、内外からの攻撃。それらは国家を疲弊させた。

誰もが国家というものに期待を無くし、その存在に疑問を抱き始めた。そしてその頃には国家とは、大地に引かれた境界の名前ではなかった。

それを是とせず、当時最新鋭であったコジマ技術を武器に蜂起したのが世界の経済を支配していた技術、資産ともにトップレベルの企業の連合体だった。

パックス・エコノミカ。経済による平和を理念に掲げ、彼らは僅か三十にも満たない戦力のみで、国家に挑んだ。

恐らく、誰しもが思ったに違いない。

「無謀だ」

だが、制圧されるまで時間の問題と思われた戦いは、挑戦者である企業連合の短期間での圧倒的勝利という劇的な形で幕を閉じる。

後に「国家解体戦争」と呼ばれるこの戦いが残したものは、大きかった。

コジマ技術の可能性、強大さ、そして危険性。

コジマ粒子に汚染された大地は生命の存在を許さず。一部の特権階級は高度2万フィートの空中都市「クレイドル」への退避を敢行

残された人々は深刻な汚染を抱えた土壌と大気に怯えながらの生活を余儀なくされた。

地上に残された人々は、僅かに残された大地にしがみつき、遙か空の彼方に浮かぶ揺り籠を睨み付ける事しか出来なかった。

企業が掲げた平和は未だ遠く、むしろその争いは増していく。今度は企業間の戦いという形で。

その戦場には、かつて国家を打ち砕いた巨人の姿が常に在った。

AROMORED CORE アイマードコア NEXTと、それを駆る狩人達。

リンクス LYNXたちの姿が。

Act・01

Act・01

『調子はどうだ?』

頭蓋の中に直接響くような女の声が、男の意識を揺り動かした。

「……悪くありませんよ、セレンさん」

落ち着き払った声で女の声に答えた男は深く息を吸った。

「いつでも行けます」

『ふん……よかるう。心しろよ? 手加減はしない』

「願っても無い」

『では開始だ』

首筋に一瞬の疼痛。五感が拡大していく錯覚の後、視界が自らの肉体のそれから別なものに切り替わる。

まるで自らが巨人になったような 否、今の彼はまさしく巨人であった。

鋼の巨人。アーマードコアネクスト。単にネクストとも呼ばれるその巨人は現在の人類における最強の兵器と呼ぶにふさわしい力を持った威容だ。

漆黒の巨体。かつて速さのみを求めて設計された四輪の機体を思わせる鋭角的なフォルムと、暴力的な威圧感の体にその巨体に見合う重火器を持った姿は、誰しにも恐怖心を与えるだろう。

『旧式の機体ではあるが時代遅れではない。未だ現役で戦えるだけの力を持った機体だ。精々振り落とされんよう、そのじゃじゃ馬を御してみる』

「了解」

言葉と同時に、機体の背面が燐光を帯びる。背部ブースターが放つそれが輝きを増し、最高に達した瞬間。

「……っ!」

甲高いジェット音に似た噴射音と共に機体が急加速する。

オーバーブースト

OB。コジマ粒子の力により短時間ながら通常とは一線を画す出力で一瞬の内に超音速まで加速した機体が向かう先にはもう一人の巨人の姿があった。

薄い桜色の機体。両手にレーザーライフルを二丁構えたその姿を視認すると同時オーバーブーストを停止すると、漆黒のネクストは右腕のマシガンを向ける。

重金属の連打音とマズルフラッシュ。桜色の機体に鋼鉄の嵐となつた弾丸が飛来する。しかし、その雨粒が桜を散らすことは無かつた。

慣れぬ者ならば、桜色の影が瞬間移動したように見えたくもしいない。

だが男はその姿をしかと追っていた。

即座に照準を修正し再び銃火を向ける。そうして威嚇、牽制しながら間合いを詰める。今度は黒い影が疾った。

クイックブースト瞬間的にブースターを最大出力で噴かし高機動で機体を走らせる

QB。それが瞬間移動のタネだった。

「この間合い……！」

更に男の機体が加速し、左腕から光刃が迸る。

「くっ……」

桜色の機体もQBで回避を試みるが僅かに間に合わず、刃が機体を掠める。桜色の装甲の一部が剥がれ落ちる。致命傷ではないにせよ桜色の機体の搭乗者が感じたプレッシャーは計り知れないだろう。

「……やるじゃないか」

女の声が幾らかの驚嘆を告げる。

「だが……」

桜色の機体が後退し距離を取る。そのまま腕のライフルから光条が飛来する。

「当てたからといって安心するのは感心せんぞ」

碌な反応すら出来ず機体にレーザーが直撃する。機体を取り囲む

光球が一瞬現れて消える。

ブライマルアーマー

PAと呼ばれるそれはレーザーを幾らか減衰させたものの消滅させるには至らない。漆黒の機体の表面が灼かれ、一部内装まで貫かれる。何とか駆動に影響は無いようだが焦燥に駆られたのは言うまでも無い。先程とはまるで逆の構図だった。

慌てた様にQBを駆使して追いつがる。マシンガンの弾丸をばら撒き、そのうちの幾らかが機体を捕らえたが有効なダメージとはいかなかった。

「それなら……」

左肩に備えられたキャノンが展開し、その砲身にエネルギーが蓄えられていく。

更に距離を詰め、マシンガンの弾丸を密集させる。

『む』

見る見るうちにPAが減衰していく。戸惑うようにQBで機体を左右に揺らし回避を試みるがそれも長くは続かない。立て続けの高速機動により一時的ではあるがジェネレーターが限界に達する。回避運動に限界を迎えた桜色の機体めがけ漆黒の機体が肩部のレーザーキャノンを打ち込む。

回避も間に合わず、PAの展開もおぼつかない状況で打ち込まれたレーザーが脚部を捉える。

『な！？』

安定を欠いた機体が傾ぐ。それを確かめるより先に漆黒の機体は動いていた。キャノンを収納。QBで至近まで距離を詰める。

『悪くない……だが、猪武者ではな！』

体勢を崩しながらライフルを向ける。真正面から迫る漆黒に向かいレーザーが発射される。

しかし。

『何っ！？』

QBで僅かに射線から逸れる。僅かに機体を掠めるも勢いを殺すには至らない。そのまま漆黒の機体は桜色の機体の横を通過し、背

後へと抜けていった。

『何のつもり』

振り向こうとした桜色の機体はその真意と、自分が既に間に合わないことを知る。

背後に回ると同時、QBで急旋回した漆黒が左腕のレーザーブレードを振りかぶり、桜色の機体、そのコアである胴部に刃を奔らせるのを見たためだ。

『……負けたか』

その眩きと同時、桜色の巨人は胸を切り裂かれ機能を停止した。

『AC TESTを終了します。お疲れ様でした』

女性の声を模した合成音声が告げる。

それに合わせ、男は自らの体に本来の五感が戻ってくるのを感じた。

『システムを終了します』

その音声が終わると、男はおもむろに首筋に取り付けられたカラー（襟）と呼ばれる機器に刺さったコードを抜き取り、コックピットを模したシートから体を起こした。

アレクシマニエレイトシステム

AMS。そのジャックが男の首筋には取り付けられていた。

誰しもが持つものではない天性の適正を必要とするそれを、男は持っていた。その才能を見出された彼は今日まで、ネクストの搭乗者としてあらゆる訓練を受けてきた。

最初はまともに歩くことすらまならなかった。

シュミレーターは何も無い空間を意思通りに歩くまで三ヶ月。そこにブースターを加えて更に三ヶ月。三次元機動と武器の扱いで半年。

マックスレートレーサー

そこからMTとの模擬戦。ノーマルACとの模擬戦とレベルを上げていき、ようやくネクストとの模擬戦まで来た。

しかしそこからは更に地獄だった。他の兵器の比ではない。ネク

ストが一線画した兵器であることをむざむざと見せ付けられた。何度地に叩き伏せられたか。

通算して二年。それが今遂に勝利を得た。

「合格だよ」

「セレンさん」

男に声をかけた女　セレン・ヘイズは渋い表情で彼の横に立っていた。隣のシートから立ち上がった彼女は渋い顔で言葉を発した。「まったく歳は取りたくないものだ。まさか貴様程度に遅れを取るとはな」

苦々しく吐き捨ててからセレンは溜息混じりに告げた。

「私自身の感傷はどうあれ貴様は私を倒した。実戦に出るに値するよ、今の貴様は」

その言葉に男の表情が引き締まったものになる。

「じゃあ……」

「企業連に正式にリンクスとしての登録を上申する。近々お前の初仕事に来るはずだ。心しておけ」

「リンクス……」

LINKS（接続者）、或いはLYNX（山猫）。AMS接続に対する適正を持ち、アーマードコアネクストを駆る戦場の狩猟者。

その数は決して多くは無く、リンクスの管理機構カレードに所属する者は増減を繰り返し現在30名。イレギュラーと呼ばれる企業非認可のリンクスを合わせても果たして50に届くかどうか。それだけの稀有な存在の一人に男は選ばれた。

即ちそれは戦場の最前線に立ち続ける事を意味する。その危険は大きく、比例して見返りも大きい。

「本当にいいんだな？」

セレンの言葉に男は頷く。

「俺は、自分の力を試してみたい。あんな牢獄みたいな研究所で試されるんじゃない、自分で確かめたい」

「よかるう。覚悟は出来ているなら構わんさ」

言ってセレンはシュミレータールームの扉へと歩く。その手前に立つとセンサーが反応し扉が自動でスライドして開いた。

「一つ忠告しておこう」

「はい」

「確かに貴様は私を倒した。だが、今の私より強いリンクスは決して珍しくは無い。……精々死なんようにな」

そう言つと、振り向きもせずセレンは扉の向こうへと消えていった。

男は起こしていた上体を再びシートに横たえる。薄暗い部屋の天井を見ながら盛大な溜息を吐いて瞼を閉じて、そのまま眠りへと落ちていく。

決して心地よくないシートでも、AMSの負荷で疲労した心身は彼の意識を強制的に落としていった。

「まったく、驚かされる」

シュミレータールームから自室へ向かいながらセレン・ヘイズは呟いた。

二年の月日。それを彼はどの程度の長さで認識しているのか。

ただの素人から二年である。

「存外、化け物かも知れんな、あの男」

“ たったの二年 ” だ。その短期間でオリジナル 国家解体戦争からのリンクスである自分を下してみせた才能ははつきり言つて望外の物ではない。

幾ら前線を退いて久しいとは言え、彼との模擬戦の内に勘は取り戻した。否、取り戻されたと言うべきか。

空恐ろしいものを感じざるを得ない。それだけの才能がある。

「果たしてどこまで行くかな……奴は」

言い終わると同時、自室の前にたどり着く。

中にある端末に向かいカラードへの申請メールを作成し始めた彼

女はまだ知らない。

その行いがやがて人類に未曾有の災厄をもたらすことを。

Act・01(後書き)

ベースミッショントEST 対ネクスト

リンクス。

繋がれた者。山猫。

企業から仕事を請け負う傭兵である彼らは駆る機体のコジマ汚染に常に晒される為、短命であると言われる。命を代償に強大な力と報酬を得る彼らは、クレイドルの建造後地上に残され、尚続く企業間の闘争の代行者として日々戦っている。

明日を生きる為に命を削る彼らを、果たして滑稽と笑うことは出来るだろうか。力なくして生き残れないのは彼らが戦いを生業とするからではない。誰とて野生の時代から続く弱肉強食のルールから逃れる事は未だ為らないのだから。

そして、また一人リンクスが生まれる。彼が何を為すのかは誰も知らない。

今は未だ。

「喜べ、初仕事だ」

早朝、シャワーから出てきた男にセレン・ヘイズは告げた。

「依頼主は企業連。ミッションの内容はラインアークの襲撃。奴等が保有する防衛部隊を潰す事が目的だ。まあ示威行為だから、それだけで良い。楽なミッションだ。詰まるところがお前のテストだ」

「ラインアークって……」

「そう、生ける伝説がいる」

「そいつも俺が？」

「いや、ミッション時にはカラードランク9・ホワイトグリントはミッションエリアから離れた場所に引き付ける。いわゆるおとり作

戦だ。都市中枢に向けて無人兵器を侵攻させる。その隙に貴様は都市外部の防衛部隊を襲撃、それを殲滅する。無人兵器とは言え航空機を用いるため対空能力の低いノーマルでは手も足も出んし、ラインアークの航空戦力では絶対数が違う。となればホワイトグリントが出張るしかあるまい」

都市中枢を攻めるんだ、無視も出来んさ、と付け足してセレンは男を見た。

「やるか？」

「……はい」

「では作戦開始は明日13:00よりとなる。今のうちに心と機体の準備をしておけ」

「了解」

告げることは述べたと言わんばかりにセレンは踵を返すとそのまま立ち去っていく。その姿を見送って一人になると、男は自分の首筋に触れる。カラー（襟）を取り外している今は直接AMSジャックに触れることが出来る。自らの首筋に埋め込まれた金属の冷たさと、体温の熱さを確かめるようにそれを撫で、男は一つ息を吐いた。此れまでの道のりを思い返す。長かったと、彼は思う。

被検体として白い牢獄にいた頃から二年。その月日は未だ年青い彼にとつては十分な長さだった。その長い時間がようやく終わり、遂に戦場に辿り着いた。

首筋から離れた手が拳を形作る。

その拳が振り下ろされる先は何処か。

「ミッション開始」

通信機を介してセレンの声が男の意識に語りかける。

「ラインアーク守備部隊をすべて排除する」

海上都市であるラインアークは物流の要衝であり、そこに連なる海上ハイウェイにノーマル部隊が配置されている。ハイウェイをラインアークに向かいミッションエリアに到達したところで作戦の開

始が告げられた。

カレードランク31・ストレイド。それが今の彼に与えられた機体だ。

旧式の機体 国家解体戦争の後に起こったリンクス戦争によりその存在を消した企業、レイレナードが開発したネクスト03・A ALIYAHをベースとしたその機体は搭乗者にとって初めての戦場に足を踏み入れた。

「ここから先は敵の索敵圏内。つまり命のやり取りをする戦場だ」セレンの言葉に身を引き締める。

『企業のネクストだと？』

通信機が敵機の通信を傍受しその声を伝えてくる。

『畜生こんな時に限って……』

ブースターが輝き漆黒の機体を空中に押し上げる。

「行くぞ……」

舞い上がった機体が前進を開始し敵機との距離を詰める。

電子音によりFCS（火器管制システム）が敵機を捉えロックしたことを告げる。視界に移る機体には赤いリングが重なって見えていた。

引き金を引くと小気味良い反動と重い連打音がフィードバックされてくる。

敵の戦力はMT。^{マッスルトレザイマルアーマー}PAの無い唯の合金の装甲などネクストからしてみれば脆いのではない。

瞬く間にMTに穴が開き爆発していく。一機、二機と撃破して行く。

驚くほどに落ち着いた心境で機体を操る。まさに今、彼に取ってストレイドは自らの手足であり、確かな力だった。

二、三の小隊を順調に蹴散らしていくとオペレーターであるセレンが敵勢がおよそ半数になったことを告げてきた。

『クソッ、効いているのか？』

『PAだ。まずはPAを減衰させるんだ！』

動揺を隠し切れない守備部隊の通信が彼我の戦力差を如実に物語っていた。

MT程度の火力では余程戦火を集中させねばネクストには有効なダメージを与えることは出来ない。その事はネクストを駆る側である彼も十二分に理解している。

故に弾丸を浴びてPAの減衰を起こさぬよう注意を怠ることは無い。左右及び前進QBで弾丸を避け、彼我の距離を詰めていく。

『通常兵器では太刀打ち出来ん』

『ノーマルはまだなのか！ ノーマルは！』

守備部隊の混乱をよそにストレイドは確実にMTを破壊していく。

「目標、残り僅かだ」

セレンが淀みなく戦果を告げる。

マシンガンのリロードを肩のレーザーキャノンで埋め、更に敵の数を減らしていく。

絶え間無い猛攻に為す術無く守備部隊は撃破されていく。

MTを破壊しつつハイウェイのトンネルを抜けた所でネクストとほぼ同サイズの巨人が待ち構えていた。

「ノーマルか」

MTよりも頑強さ、火力、機動力。その全てに優れ、国家解体戦争以前は戦場の覇者であった兵器だ。

とは言え、ネクストにその座を取って代わられたのもまた事実である。

マシンガンの弾丸がノーマルを挟むが、MTと違い直ぐに撃破とはいかなかった。

「硬いか……なら」

ストレイドの肩に設置されたレーザーキャノンが展開し、視界に新たにリングが出現する。それがノーマルACに重なり赤くなつたのを確認し、リンクスはその力を解放した。

金属が灼け付く程の熱量を持った光がノーマルの体を貫き、一瞬遅れてその体が爆炎に包まれる。変わらず淀み無い動きでノーマル

を破壊していく様は、今日初めて戦場にたった者とは思えぬほど悠然としていた。

ノーマルの小隊が二つ壊滅し、残るは1小隊。ハイウェイの支柱を挟んだ対岸の車線に配置された部隊目掛け、漆黒の機体が宙へ舞う。

その姿はまるで鴉だ。

ノーマル乗りをレイヴンと呼び習わすこともあるが、それとは違う。空を自由に駆ける本物の鴉の様だった。

中空からの射撃に立て続けに三機、機体が対岸の路線に辿り着くより早くノーマルが撃破される。

炎だけが燃え盛るアスファルトにストレイドが着地すると同時、セレンが声を上げた。

「敵増援を確認。ノーマル部隊か。油断だけはするなよ」

リーダーにはラインアークが存在する方向から4機編成2部隊の接近を表示していた。

「了解」

短く答えてストレイドが再び飛翔する。マシンガンとレーザーを空中から浴びせるように撃ち込み、ノーマルを撃破していく。

「気を付けるよ、あまり燃費の良い機体でもない」

「わかってますよ」

セレンの言葉に従うように機体を着地させ今度は地上を駆ける。

数の減った小隊の一機目掛け、QBを利用しながら距離を縮め左腕のブレードを振るう。

光の刃に容易く切り裂かれたノーマルは隣の機体を巻き込み爆発した。

「残りは……一機」

対岸から弾丸を送り込んでくる機体を視界に捉え飛翔する。

「仕舞いだ」

QBで翻弄し更に背後に回ったストレイドが空中からブレードを袈裟懸けに振り下ろす。

斬撃を受けた機体の爆発音を最後に銃火の音が止んだ。

圧倒的だった。その力の差はあまりに大きい事を示すには十分すぎる戦果だ。

「全目標の排除を確認。ミッション完了だ。よくやったなほぼ完璧だ」

セレンがミッションの完了を告げる。

「……とは言え、あまり調子付くなよ。敵が弱すぎたのだからな」

「……はい」

「? どうした、今更怖くでもなったか」

「いえ……何でもありません」

「まあ良い。さっさと引き上げるぞ。おとりが全滅したとの連絡が入った。もたもたしているとホワイトグリントが来るぞ」

「了解。ストレイド、帰還します」

男は、自分の内にある高揚を抱えたまま、ラインアークに背を向ける。

「?」

何かを感じ取った気がして一度だけ振り返る。しかし、そこには自らが行った破壊の後があるばかりである。MTとノーマルの残骸が広がるだけのそこから何を感じ取るのだというのだろう。

「気のせいかな……」

若きリンクスは機体を反転させると、オーバーブーストOBを起動して、自らの初陣の戦場を後にした。

同時刻。ラインアーク中枢。

女性の声が響く。

「敵戦力の殲滅を確認。レイヴン、お疲れ様」

純白の機体が宙に在った。街を見下ろすように佇む姿は守護者と呼ぶに相応しいものだった。周囲には撃ち落された無人の航空機が墜落している。

だが、その機体はまるで戦闘に参加していなかったかのように、

その純白の機体には傷一つ付いていなかった。

もつともこの戦果はその機体一機によるものであり、機体の美しさはその力の強大さの証左であった。

「防衛部隊の応援に　いえ、守備部隊を殲滅して引き上げていくみたい。今からでは間に合わないわね。私達を脅迫したいのね、企業連は」

オペレーターの言葉を受けてか、純白の機体が静かに舞い降りる。「襲撃者は……データ照合。先日カロードに登録された新人ね。A Cネームはストレイド。スポンサーは無し。独立傭兵みたいね」

その声を聞いているのか否か。純白の機体のカメラアイは襲撃のあった方向に向けられ、そのまま、まるで立ち去った襲撃者を睨み付けるように固定されていた。

「気になるの？　ストレイドが。……でも今は追わないで。敵は去ったわ」

しばらく反応も無く、純白のネクストは動かなかったが、やがてブースターを吹かし宙へと舞い上がる。

甲高いジェット音に合わせ背部ユニットが展開していく。開かれたハッチからは燐光が噴出し、横一列の形へと変じていく。

純白の機体がOBを機動したのだ。オーバーブースト

音速を超える速度で空を翔るその背中には、展開されたユニットから伸びる光。それはまるで光の翼の様であった。

「帰りましょう、レイヴン」

レイヴン。

白い鴉。

その翼を鳥のものとするなら、これほど似つかわしい呼び方もあるまい。

空を翔る鴉その体に刻み込まれたエンブレムもまた、鳥の姿をした神を現すホルスの目。

リンクス解体戦争の英雄であった男がその機体に刻んでいたエンブレムであり、それを持つネクストはこう呼ばれる。

白い閃光　　ホワイトグリントと。

カリードランクNO.9　ホワイトグリント。
ラインアークに所属するネクストであり、生ける伝説とも称される。

ランクNO.9とて、彼の實力を示すものではない。カリードランクは政治的な意味も込められた序列でしかない。人によっては最強のネクスト戦力とすら言われる彼と、最も新しいリンクスが相対するのはこれより少し先になる。

Act・02(後書き)

ベースミッション：ラインアーク襲撃

デビュー戦を終えたリンクスの名は企業にとって「使える駒が増えた」程度の認識に留まった。

別段難しいミツシオンではなく、並みのリンクスであればたいした苦戦を強いられることもない。

カラードラंक31・ストレイドは旧レイレナード製を扱うことを除けば別段珍しくもない存在であった。

リンクス自身、その評価に不満はなかったし、妥当なものだと了承していた。彼の才能を正しく捉えていたのは二年の月日を共にした、彼の師でありオペレーターであるセレン・ヘイズのみであったかもしれない。

初ミツシオンを終えてしばらくの休養期間。その間も彼女は新たなリンクスを戦場に適応させるための訓練を課し続け、リンクスもそれに応えた。

効率的な機体運用。効果的な戦術。あらゆる状況に対応する判断力。

リンクスは狩人として、その爪を研ぎ続ける。

その日、三度目になる模擬戦を終え、午前の訓練を終えたリンクスにセレンが声を掛けた。

「今日のシュミレーター戦だが、以前より格段に動きが良くなってきたな。慣熟運転の成果といったところか」

「……セレンさん」

「ん？ どうした？」

「対ネクスト戦なんですけど」

「……またその話か。カラードオーダーマッチへの参加。どうしてそれにこだわる？」

「俺は試したいんですよ。自分がどこまでやれるのか」

「自らの可能性か……それがお前の原動力だったか」

オーダーマツチ。

リンクス管理機構カロードの主催するリンクス同士の模擬戦である。発足後、形骸化したカロードが唯一十全に運営するこのリンクスは、リンクスの品評会としての意味を持つ。ここで戦果を上げ、企業の目に留まれば依頼も大口のものを回される。逆に評価されなければ依頼は来ないだろう。

とは言え、カロードが公正明大なランク付けを行っているかはまた別問題である。そこには少なからずの政治的な意図と駆け引きが含まれるからだ。

故に、ミッションの遂行と、カロードランク。その二つを総合して初めてリンクスの価値は決まるのだ。

「お前はまだ初仕事を終えたばかりの新人。客観的に見ればまだまだひよつこだ。今はミッションに専念しろ」

「でも……！」

「二度は言わん」

強く言ってセレンは背を向ける。

「午後からは休養だ。体を休めておけ」

「……了解」

果たしてセレンは気付いていたか否か。背後のリンクスが握り締めた拳と、睨み付ける強い視線に。

自由を与えられたリンクスが午後の時間を潰すのに選んだのは最寄のコロニーの散策という手段だった。

地上に残された数少ない生活圏は、多くの人で埋め尽くされ、混沌の様相を呈している。

市場通りは雑多な露天と客に埋め尽くされ、まっすぐ歩くことすらままならない程だった。人ごみを縫うように歩き、露天に並べら

れた商品を眺めるでもなく視界に写していく。

枯れた大地にあつて尚、生命に対する渴望を失わない姿は、リンクスに一種の憧憬すら抱かせる。

彼は、リンクスになる以前、幼い頃より被検体として研究施設で育った。

いつからそこに居たかは彼自身定かではない。生まれた頃からかもしれないし、幼い頃に引き取られたのかもしれない。彼はその事を誰かに尋ねる事はしなかったし、尋ねたところで果たして答えが返ってきたかどうか。

ただ言えるのは。人生の大半をそこで過ごした彼には、生の実感というものが欠如していた。飼育されているような生活は彼の心を磨耗させた。

感情というものが希薄になつていく中で、唯一彼の心の内に残ったのは自分の力を試したいという感情だった。

『類稀な適正である』

『ジョシユア・O・ブライエンに匹敵するか……あるいは凌駕する可能性も』

『しかし彼は駄目だ、感情が薄すぎる。傭兵には向かん』

『何より研究対象として、失うには惜しい』

周りの研究員の言うことは良く分からなかったが、自分に「なにか」が出来るという事だけは分かった。

ならそれを試してみたい。

言葉にすることはしなかったが、その思いがずっと彼のうちに燻り続けた。

その願いが叶えられるのは、二年前、彼を閉じ込めた白い監獄が、桜色の巨人によって碎かれるまで待たねばならなかった。

『施設内に侵入者。総員、退避して下さい』

白い壁に赤い光が反射するのを彼はじっと見ていた。時折遠くで

爆破音がし、その度に彼が居る部屋が揺れた。

周りには誰も居ない。いつもならガラス越しにこちらを覗いている研究者達は警報が鳴り出した途端逃げ去った。

一人残された彼は脱出もままならず、ただすべてが終わるのを待つしかなかった。

一体どれ位そうしていたか、気が付くと爆音が止んでいた。警報は施設のシステムがダウンしたからかしばらく前から止んでいたため、今は静寂に包まれていた。

「終わった……？」

呟いて、しかしそれは間違いであることに気付く。

噴射音。

それが徐々にこちらに近付いて来ていた。もしかしたら他の施設の破壊が終わり、ここが最後かもしれない。ここに自分が居ることは気付いていないだろう。

「死ぬ……かな？」

ここが破壊されるなら、自分もただでは済まないだろう。運がよければこの牢獄から抜け出せるかもしれないという希望が頭をよぎったが、あまり期待はしないでおくことにした。生きるか死ぬかも分からない現状では過ぎた願いだ。

噴射音は近づいていて、壁越しにも関わらず、既に耳に痛いほどだった。それが弱まっていくのはここにたどり着いたからだろう。

案の定、一際大きい振動が部屋を揺らした。外にある何かが着陸したのだということは容易に想像できた。

鈍い駆動音。

「死にたくは……ないな」

爆音と衝撃が襲い、意識ごと彼は吹き飛ばされた。

「う……」

意識がなかったのはどれくらいの時間だったか。瓦礫に背中を預

けるようにして気を失っていたらしく、動こうとしたところで背骨が軋みをあげるだけだった。

折れているかもしれないが、今は全身が痛みを訴えていて逆に感覚が鈍っているのか詳しいことまでは分からなかった。

「聞いていないぞ、こんなことは。最高機密？　これが？　……ただの子供じゃないか」

女の声が耳朶を打ち、そこで初めて目の前に人が居ることに気付いた。

「生きているな、貴様？」

「あ、ああ……」

見上げた女の背後には、桜色の巨人が聳え立っていた。

まるで神話に現れる神のような威容。力そのものを体現したような存在感。

「これ、あんたが？」

なんとか搾り出した声で尋ねると、女は静かに頷いた。

「企業の依頼でここの最高機密を奪取して来いと言われている。…

…まさかお前のような子供とは思わなかったが。……いや、お前のような子供でなくていいのか？」

女の呟きの意味は分からなかった。一人で納得する女に自分はずっと声を掛けるべきか。

「何を言って……」

ようやくそれだけ言いかけたが、女は彼が言い切る前に言葉を返してきた。

「外に出たくはないか？」

「……出たい」

女の口端に笑みが浮かぶ。

「連れて行ってやる」

「え？」

反応するより早く女の肩に担がれていた。

「安心しろ。骨は折れちゃいない。仮に折れていても歩ける」

無茶苦茶な言い振りだったが、不思議と嫌な気はしなかった。研究者達の無機質な言葉に比べれば、女の言葉には人の体温があった。引きずられるように巨人の前まで連れて行かれる。

「自由を求めるか……。ならばやはりお前は機密なんかじゃないさ。ただの人間だ」

「人……間……」

巨人の胸が開き、中からワイヤーウインチが下りてくる。

「さあ、自由の空に御招待だ」

『敵増援確認。ノーマルです』

「ふん、私をノーマルごときで止められると思ったか。安く見られたものだ」

巨人の中、不遜に笑う女を彼は後ろから眺めていた。

モニターに写された機体が次々と撃ち落されていくのを見ながら、自分の中に沸々と湧き上がるものがあるのを彼は感じていた。

自分にも出来るだろうか、彼女のように自由に空を舞うことが。

窓で区切られた四角い空ではない。どこまでも広がる本物のこの空を。

「俺にも、出来ますか」

「何をだ？」

「貴女みたいに、こんな風に、自由になることが俺にも出来ますか」

「……お前次第だな。なりたいのか？ 私のように」

「はい」

女の肩が震えているのが分かった。笑っているのだと気付いたのは、その次の女の声が楽しそうだったからだ。

「いいだろう。ちょっと待ってる」

言って、女がコンソールのパネルを操作する。

「クライアント。こちらカスミ・スミカだ。ミッションは失敗。繰り返すミッションは失敗だ」

『済まないリンクス。もう一度言ってくれないか』

スピーカー越しに男の声が聞こえた。女 先ほどカスミ・スミカと名乗った彼女は振り返り、唇に指を当て「黙っている」とジェスチャーしてきた。

「勢い余ってすべて壊した。何も残っちゃいない。何もだ」

『……貴様。自分が何をしたか分かっているのか？』

「契約破棄か？ 構わんぞ。それだけの事をした自覚はある」

『君の処遇は追って伝える。今は帰還したまえ』

「了解」

通信が終了したことを伝えるメッセージが表示されると、カスミは愉快そうに笑って見せた。

「これでこの世界に、白い檻で飼われた小鳥はいない事になった。

お前はもう自由だよ」

成熟した女性に似つかわしくないほど無邪気な笑みで言うと、カスミは告げた。

「私がお前を飛ばしてやる。丁度傭兵稼業も潮時だ。何ならお前のオペレーターをやるのも悪くはないかも知れんな」

「飛ばますか」

「飛べるさ。お前には翼がある。きっと誰よりも大きな翼が」

それが、今の彼が生まれた日の出来事だった。

彼が命を尊いと思うのは、彼にとって生きるということが決して当たり前ではないからだ。だから彼は限りある命のある内に何が出るのを探りたいと思っている。

そうして自らの命の価値を確かめたいのだ。

意識を過去から現在の雑踏に戻す。

人が溢れている雑多な街の空を見上げると、そこにはかつて見た空はない。

環境汚染対策の為に街そのものが密閉空間に押し込められている

為、見上げたところでそこにあるのは巨大な天蓋でしかない。

さらのその上にはクレイドルが悠々と飛んでいるだろう。

地上の檻と、空の揺り籠。今人類に生きるのが許されたのはその二つだけだ。

彼にはそれが違和感となつてのしかかる。

人はもつと自由であるべきなのに。その想いが日々増していくのを彼自身自覚していた。そのための術こそ知らないが。

見上げるのを止め歩き出す。この狭い世界の中で人々はそれでも精一杯生きているのだ。それを否定は出来ないのかもしれない。

所詮、感傷だと彼は考えるのを止める。

「ん？」

懐のPDAが着信を告げる。取り出したPDAのディスプレイにはセレン・ヘイズからの着信であることをが表示されている。

「はい。どうしましたセレンさん？」

PDAのマイクに向かい声を掛けると、二年前から変わらない伶俐な声が返ってきた。

『ミッションの依頼だ。悪いが戻って来てもらおう』

「了解。どんな仕事です？」

『依頼主はGA。内容はミミル軍港襲撃だ』

「分かりました。すぐ向かいます」

通信を終え。リンクスは来た道を引き返す事にして歩き始める。

雑踏の中、人々の活気の裏でまだ戦いが繰り返されていることを思い出して。

その片棒を自分が担いでいることを内心で自嘲しながら。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1439u/>

AROMORD CORE forAnother

2011年6月19日19時40分発行